

K. Mahadevan (ed.)
Fertility and Mortality
Theory, Methodology and Empirical Issues

New Delhi: Sage Publication, 1986, 351pp.

本書は、世界的に活躍しているインドの人口学者C. Chandrasekaran を祝い1984年にインドで開催された「社会と人口の変動」と題するセミナーで発表された論文をまとめたものである。低開発地域の人口増加が社会経済の発展に大きな影響を及ぼしていることから、セミナーでは、出生と死亡に関する諸理論と、インドのデータを用いた出生と死亡の低下についての実証分析が報告され、その中から18の報告が本書に収録されている。

第一部「出生力の理論」では、はじめにデービスとバンデンオェバーンが、出生率と死亡率の低下をもたらす男女間の関係の変化とくに性役割への影響を検討している。すなわち、再生産年齢では男子超過・60歳以上では女子超過となること、特に再生産年齢の独身者では男性過剰がより大きくなり結婚市場に影響すること、また子供の独立後の夫婦のみの期間が長期化し離婚の可能性が高まるので生活安定のために婦人の就労意欲が高まることなどから、出生率は長期的低下傾向となるものと結論している。フリードマンは、数十年に渡る研究にもかかわらず出生力の決定因についてよくわかっていないと述べている。なぜなら、低開発地域における最近の出生率低下は急速な社会経済的発展なしに実現されているし、世界出産力調査の結果は出生力と社会経済的要因との関連性が小さく、地域社会構造に関する諸要因と関連が深いことを示しているからである。ナンボディリは、社会開発と人口変動に関する諸理論のポイントを紹介し、これらが統一された理論となっていないこと、ヘルマリンは、出生力の水準・パターン・その調節の方法についての考え方を紹介し、フォーセットは子供の価値と費用の理論と実証分析の成果をまとめている。

第二部は、「文化と出生力」に関するインドにおける6つの実証的研究が収録されている。チャンドラセカランは、人口変動と社会経済変化についての古典的調査となった1951年のマイソール人口調査においても出生力にたいする文化的要因が重要であったこと、マハデバンとクリシュナンはともに、文化的要因としての宗教とカーストの影響を報告している。ラニは、子供の直接的・間接的費用と出生力について報告し、ナイデュは、労働に季節性のある農家よりも自営業の方が子供の労働需要が大きいため出生力水準の高いことを示している。またナヤールは、ケララ州の出生率が極めて低い理由として女子の地位が高いこと、すなわちキリスト教の影響下による女子の高い教育水準と女性の権利を尊重した相続制度、高い初婚年齢、衛生環境、そしてこれらが家族計画を受け入れる素地となっているとしている。

第三部の「社会変化と出生力」では、はじめにスリニバサンが近代化と出生変動に関する理論的整理を行い、クルブがケララ州では資料の制約もあって教育以外の要因との関連性がみつけだすことができなかつたと報告している。ハルは、インドネシアの出生低下について国際比較を念頭において分析を行い、独立などの政治制度の改革と教育制度の改革などインドネシア特有の歴史的要因も重要であるとしている。レディは、ハイデラバード市で相対的に高出生率のスラム居住者と低出生率の一般居住者を比較し、居住者の出生力水準が結婚年数・出生間隔などの人口学的要因と同時に息子の価値などの要因が影響していることを示している。

第四部は死亡についての3つの論文を収録している。マハデバンは、乳幼児死亡の分析枠組みの整理を行い、ナムとハリントン、これまで相関分析が中心となっていた疾病死亡研究に個人の若年期の生活歴をも要因とするマイクロ分析の枠組みといくつかの実例を報告している。最後にマハディバランは、インドの3つの民族の乳児と幼児の死亡率を比較することによって乳児死亡率は生物学的要因、幼児死亡率は環境要因が重要な役割を果たしていることを報告している。最後の第5部は、チャンドラセカランの略歴と研究業績がまとめられている。

本書は、論文集の形式を取っているが、既存の理論を再整理すると共にインドにおける説明力を実際のデータを基に検討している。日本においてもこのような視点に基づく比較研究が必要であると思われる。

(伊藤達也)